

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284046

研究課題名(和文) 西欧アヴァンギャルド芸術における知覚のパラダイムと表象システムに関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study on Paradigms of Perception and Representation Systems in the European Avant-garde Movements

研究代表者

山口 裕之(Hiroyuki, Yamaguchi)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：40244628

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：西欧のアヴァンギャルド運動には、各文化に固有の特質が存在するとともに、他方では文化圏を横断する特質を見取ることができる。この研究の目標は、この時代に技術性が顕著になったさまざまなメディアによってアヴァンギャルド運動においてどのような知覚のパラダイム転換が生じていたか、またそれがそれぞれの文化圏においてどのような現れ方の特質を伴っていたかを明らかにすることである。2回のシンポジウム等を通じて、断片性と抽象性、機械的なものと身体的なものとの結合という、アヴァンギャルド運動にしばしば見られる特質が各文化圏でどのように姿を現しているか、それらの特質が相互にどのように結びついていることを確認できた。

研究成果の概要(英文)：The various European avant-garde movements of the early 20th century exhibited two contrasting aspects: while they differed from one another in each's having distinctive features that reflected the differing cultures of specific regions, they also appear as parallel, transnational, and transcultural phenomena that happened to develop during the same period and in similar directions. Our research has focused on trying to understand how these avant-garde movements reflect, in their respective ways, paradigm changes in perception arising from the development of technologies in various media. Through symposiums, workshops, and individual research efforts, we have examined how the avant-garde movements of different regions showed, in their respective ways, such common features as fragmentation, abstraction, and the combining of the technological and the corporeal and how these features related to one another.

研究分野：German Literature and Culture Studies

キーワード：知覚論 表象文化論 アヴァンギャルド 芸術 文学 技術性 身体性

1. 研究開始当初の背景

(1) テクノロジーの加速度的な進展にともなって展開している「視覚文化」研究が、おもに「視覚文化」としてとらえられるコンテンツを中心的対象としているのに対して、「視覚性」そのものを考察の対象とする思想史的表象研究(「視覚論」)も、現在大きな広がりを見せている。この学問的論議に大きな刺激を与え、その最も明確な機動力となったのは、ジョナサン・クレーリーの“Techniques of the Observer: On Vision and Modernity in the 19th Century”, MIT, 1990 (『観察者の系譜』)およびそれに続く著作“Suspensions of Perception: Attention, Spectacle and Modern Culture”, MIT, 1999 (『知覚の宙吊り』)である。これらの論議で基本的前提となっているのは、視覚は一方で身体的・生理的メカニズムとして与えられたものでありながら、他方で視覚のうちにとらえられるものは歴史的・文化的に規定され、それによって「視」の文化的制度を形成しているということである。クレーリーの研究が基本的に19世紀の「視」のパラダイム転換(19世紀初頭の新たな視覚経験の誕生、および19世紀後半における「注意(attention)」の枠組みの形成)を問題としているのに対して、本研究ではその基本的前提や他分野にわたる方法論的視点(技術史・思想史・美術史・美学・メディア理論等のコンテクスト)を継承しつつも、20世紀初頭、とりわけ1920年代以降の明確なアヴァンギャルド芸術・文学の知覚論的分析を課題の中心に据えている。ここで焦点を当てるのは、19世紀末の「モダニズム」ではなく、直感的に経験可能な美的享受を戦略的に踏み越えることにより人間の知覚に対して新たな挑戦を提示した、アヴァンギャルド芸術にける知覚の可能性である。また、従来の研究が圧倒的に「視覚」研究としての性格を際立たせているのに対して、本研究ではむしろ「知覚」全体の問題としてアヴァンギャルド芸術・文学の経験を考察することになる。

(2) このように、経験的知覚の彼方で機能する構成性によって生み出された新たな知覚の可能性を検討する場合、必然的に技術性およびメディアの問題が考察の射程に含まれることになる。本研究の対象とする1920年代にはすでに、映画の広範な受容を直接のきっかけとして、例えば、ベンヤミン、パラージュ、クラッカウアー等にとって、映画という技術メディアが全く新たな知覚の経験の次元を生み出していることが意識されていた。ここで問題となるのは、もちろん知覚の転換をめぐる単なる歴史的証言ではなく、知覚の基盤となる身体性と

技術メディアという二つの異領域の境界面としての「インターフェース」という現象である。技術によって新たな知覚の次元が生み出されるとすれば、そこでは必然的に界面としてのインターフェースが介在している。アヴァンギャルド研究においてこういった視点を導入することは、この研究領域においてまったく新たな道を切り拓くことになるだろう。

(3) さらに、本研究を「表象研究」として位置づける場合、グローバルなレベルで理解されているわけではない「表象文化論」という概念を手放して用いることはできない。本研究は、作品およびその形成プロセスとしての外的「像」、および「イメージ」としての内的「像」としての「表象」研究として、研究遂行のさまざまな段階において、研究上の基盤としての「表象文化論」の概念につねに立ち返るとともに、国外でも流通可能な概念として表象研究を位置付けていくことを目指す。

2. 研究の目的

「視覚論」「知覚論」は人間の知覚という生理学的現象が、歴史的・文化的に形成され規定されたものであるという前提に立つ。本研究はその基本的立場を継承しつつ、技術と知覚の相互関係に対する視点を、とりわけ20世紀のアヴァンギャルド芸術研究へと敷衍する。それによって、(1)アヴァンギャルド研究の領域においては、従来の美学的・思想的・文化的研究の視点を越えて、芸術と知覚の関係に対する枠組みの転換が生じていることを明らかにするとともに、(2)技術論・メディア論的な視点では、技術と知覚の境界としてのインターフェースの問題をこの表象研究において展開することになる。(3)また学問論的問題として、日本で形成された「表象文化」の概念をグローバルな文化研究の論議に接合させてゆくことも重要な理論的課題の一つとなる。

3. 研究の方法

(1) 知覚と技術に関する理論的言説および「表象文化」の理論について、基盤となる知識・概念・理論的バックグラウンドを共有

本研究は、ヨーロッパのそれぞれの地域におけるアヴァンギャルド芸術・文学運動の個々の分析という個別研究、および「知覚論」「表象文化論」をめぐる理論的考察という二つの側面をもつ。理論的側面は、アヴァンギャルド研究の基盤になると同時に、最終的にはそこから導き出される理論

的成果となることが想定されている。その意味においても、本研究を進める上でメンバーがこれらの理論的・方法論的連関を最初の段階で十分に理解し共有しておくことがきわめて重要な課題となる。本研究ではそのためのミーティングおよびワークショップを研究の出発点とともに、各段階において随時行う。

(2) 研究者ネットワークの形成

個別研究およびその理論化のいずれにともなっても、この研究にとって国内および国外の研究者間のネットワークを形成することは決定的に重要な意味をもつ。国内研究協力者や海外共同研究者を中心にしながら、本研究を展開させてゆくための研究者とあらたにコンタクトをとり、研究ネットワークをさらに充実させてゆく。

(3) アヴァンギャルド芸術・文学に関する個別研究

最初のステップ(1)によって本研究のプロセスおよび到達点を確認したうえで、ヨーロッパで 1920 年代以降、芸術・文学における革新運動に関してもっとも顕著な展開をみせたイタリア、フランス、ドイツ、ロシアを中心とするアヴァンギャルド芸術運動につき、それぞれの地域で研究代表者・分担者を核として個別の研究グループを形成し、各グループで研究ワークショップを行う。そこでは知覚論の視点から具体的対象に関する個別研究を行う。ここではまた、研究目的についての理解の共有を図る。

この研究は一方で個別のアヴァンギャルド研究であるとともに、他方でつねに知覚と技術をめぐる理論的研究でもある。各個別グループにおける研究は、最終的にヨーロッパにまたがる理論的考察を念頭に置きながら、イタリア未来主義、シュルレアリスム、表現主義・ダダ、ロシア・アヴァンギャルドにおける具体的対象を取り上げる

ことになる。研究代表者および分担者が、これらの個別の研究グループの核となり、この過程において、必要となる文献をそれぞれのグループにおいて明確にし、その収集も進めてゆく。

(4) シンポジウムの開催

理論的枠組みを批判的検討し、個別の研究によって全体としての現象を比較検討する場として、国内研究者を中心とするシンポジウム、及び国際シンポジウムを開催する。

4. 研究成果

西欧のアヴァンギャルド運動には、各文化に固有の特質が存在するとともに、他方では文化圏を横断する特質を見て取ることができる。2 回のシンポジウム等、研究期間中継続的に行われたワークショップ、そして個々の研究を通じて、断片性と抽象性、機械的なものと身体的なものの結合という、アヴァンギャルド運動にしばしば見られる特質が各文化圏でどのように姿を現しているか、それらの特質が相互にどのように結びついていることを確認できた。

アヴァンギャルド全般に当てはまる特質として、一方ではクレリーが指摘するように、主体の側での知覚の再編成のプロセス(「カメラ・オブスクラ・モデル」の転換)が、重要なパラダイム転換の一面を担っていることが確認できる。それとともに、ベンヤミンが複製技術論で強調しているように、技術メディアの特質によって人間の知覚のあり方に転換が生み出されているという側面も同時に存在する。これらがともに、アヴァンギャルド芸術・文学にしばしば特徴的に現れる「断片性」や「抽象性」を生み出す力となっているという点では、アヴァンギャルド運動は汎ヨーロッパ的現象としての性格を間違いなく持っている。それとともにこの研究は、各文化圏でのそれぞれのアヴァンギャルド運動、それぞれの芸術家・作家の特質を確認する場ともなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

- 山口裕之、The Mechanical Body and Perception of the Unperceivable in the Avant-garde, 査読無し、Perception in the Avant-Garde, 2017, 136-144
- 吉本秀之、日本におけるカメラ・オブスクラ = 写真鏡、Perception in the Avant-Garde, 2017, 125-135
- 前田和泉、見えない者のヴィジョン -- マリーナ・ツヴェターエワ後期作品における視覚性と非・視覚性、Perception in the Avant-Garde, 査読無し、2017, 111-124
- 松浦寿夫、非飽和性の庭、Art Trace Press, 査読無し、4 巻、2016
- 沼野恭子、衣服の二重性 またはラーマノフの挑戦、『総合文化研究』、査読無し、18 巻、2014、5-24
- 沼野恭子、前田和泉、砂漠の奇跡—イーゴリ・サヴィツキートウズベク・アヴァンギャルド、『総合文化研究』、査読無し、19 巻、2015、126-143
- 山口裕之、»The Russian Avant-garde from the Perspective of Walter Benjamin«, in: *Метаморфоза культур и новые перспективы*, 査読無し、2015, 107-116
- 松浦寿夫、同時遍在性の魔 3、Art Trace Press, 査読無し、第 3 巻、2015 年、200-209
- 沼野恭子、«Парадокс японизма – Внедрение кимоно в русскую культуру начала 20-го века» 論集 『Метаморфоза культур и новые перспективы』、査読無し、2015 年、168-181
- 山口裕之、アヴァンギャルドの身体性、『総合文化研究』、査読無し、18 巻、2014、25-41

〔学会発表〕(計 8 件)

- 西岡あかね、第一次世界大戦の技術体験と新しい人間像の変容、「臨界のメディアとアヴァンギャルドの知覚」、東京外国語大学
- 和田忠彦 (招待講演) 2016.5.3 Fissure ovvero fessure, 国際シンポジウム Tabucchi postumo. Da 'Per Isabel' all'archivio Tabucchi della Bibliothèque Nationale de France @ Université Libre de Bruxelles – Istituto Italiano di Cultura di Bruxelles
- 和田忠彦、Le forme nel tempo: la ricezione di Clavino in Giappone,

- 2016.5.3. Tabucchi postumo. Da 'Per Isabel' all'archivio Tabucchi della Bibliothèque Nationale de France @ Université Libre de Bruxelles – Istituto Italiano di Cultura di Bruxelles
- 和田忠彦、鉄道、映画、そして郊外—ピランデッロに見る近代化と感覚変容、アヴァンギャルドの諸相、2015.11.16, 東京外国語大学
- 松浦寿夫、Un rien, mais ce rien est tout, Colloque international Roland Barthe, l'exriture et la vie, 2015.11.9. 青山学院大学
- 西岡あかね、大正期におけるドイツ表現主義受容、日本比較文学会、2014.10.11.、二松学舎大学九段下キャンパス
- 山口裕之、Transformations Caused by the Acceptance of 'Foreign' Elements. A look at an Extreme Case in the History of Japanese Translation, 2014.11.24, Salone Marescotti, Dipartimento delle Arti, Università di Bologna
- 和田忠彦、Traduzioni e trasposizioni letterarie tra Oriente e Occidente: Seminario dedicato, 2014.5.7. Dipartimento di Storia, Culture, Civiltà - Università di Bologna

〔図書〕(計 2 件)

- Tadahiko Wada / Stefano Colangelo, *Paesaggi corporei: percepire, scrivere, incarnare il mutamento*, Tokyo University of Foreign Studies, 2015
- Hiroyuki Yamaguchi (ed.), *Perception in the Avant-Garde*, Tokyo University of Foreign Studies, 2017

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

山口 裕之 (YAMAGUCHI, Hiroyuki)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：40244628

(2)研究分担者

和田 忠彦 (WADA, Tadahiko)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：50158698

松浦 寿夫 (MATSUURA, Hisao)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：60219384

沼野 恭子 (NUMANO, Kyoko)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：60536142

吉本秀之 (YOSHIMOTO, Hideyuki)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：90202407

前田 和泉 (MAEDA, Izumi)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：70556216

西岡 あかね (NISHIOKA, Akane)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：30552335

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

桑野 隆 (KUWANO, Takashi)
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：90143677

香川 檀 (KAGAWA, Mayumi)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：10386352

桑田 光平 (KUWADA, Kohei)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：80570639

土肥 秀行 (DOI, Hideyuki)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：40334271